



きゅうり9月以降の栽培管理と 今年発生が多かった病害虫について

令和5年9月28日

J Aふくしま未来伊達地区本部／伊達農業普及所

◆ これからの管理のポイント ～気温が低下してきます～ ◆

これからは、気温の低下とともに『根の動きが弱く』なってきます。根の動きを止めずに草勢を維持するため、『温度』と『湿度』、『追肥』管理が重要になってきます。

また、炭疽病とハダニ類の発生が目立ち、つる枯病の拡大も懸念されます。早期防除を徹底しましょう。

1 草勢維持

(1) 根張りを促進・維持しましょう！

雨よけ・露地栽培では、土が固まって通気性や排水性が悪くなっており、根が老化してきています。また、抑制栽培では、定植後の活着遅れが見られるほ場もあるので、発根促進剤や酸素供給剤等を施用し、根張りを促進・維持しましょう。

- 発根促進剤：ステップV、アミハートなど
- 酸素供給剤：MOX、ネハリエースなど

(2) 積極的な追肥・葉面散布をしましょう！

当面、気温が高い間はリン酸・加里割合の高い追肥を継続します。気温の低下とともに、肥料が吸いにくくなってきたら窒素割合の高い肥料に切り替えましょう。

- 窒素成分で0.5～1.0kg/10a、3～5日間隔を目安に施用する。

リン酸・加里割合の高い液肥：トミーネクサスグリーンなど

窒素割合の高い液肥：トミーブラック、トミーエボリューションなど

- 夜温が20℃以下になる頃には肥効が悪くなるので、液肥を活用する。

※抑制きゅうりは、液肥と併せて、粒状肥料（窒素成分で1回当たり0.3kg/10a程度）を3～5日おきに通路等に施用する。

- 根からの吸肥力が弱くなってきている場合は、葉面散布を行う。

吸収の早いアミノ酸系：アミノメリット青、ホップアップなど

- 抑制きゅうりでまだら葉が見られる場合、アミノ酸系肥料と一緒にグリーンセーフプラスを葉面散布して光合成能力を高める。

2 ハウスの管理

(1) ハウス内温度を確保しましょう！

- 夕方ハウスの内温度が18℃程度になったらハウスサイドを閉め、ハウス内の最低気温15℃程度を確保する。
- サイド開閉を始めても妻窓は開けておき、夜間の湿度上昇を防止する。最低気温が13℃程度に下がったら妻窓も閉める。
- 翌日の朝の気温が冷え込む予報のときは早めに閉める。
- 日中は、25～30℃を目安に換気を行う。

(2) ハウス内湿度を確保しましょう！

気温の低下とともに収穫量が少なくなってくるので、かん水量も少なくなる傾向が見られます。

- ハウス内湿度が低いと草勢が弱くなるので、ベッド内の土壌水分に注意しながらかん水を行う。

9月中旬以降の天気予報では、平年よりも高温多湿条件となる見込みです。ハウスの温度・湿度管理に注意してください。



3 病害虫防除

(1) 病害

当面は気温が高い予報なので、炭疽病、つる枯病、疫病の発生に注意しましょう。気温の低下に伴い、低温性の病害（黒星病、斑点細菌病、菌核病、灰色かび病）発生が予想されます。早期発見・早期防除に努めましょう。

(2) 害虫（令和5年9月6日現在の登録情報に基づいています。）

ハダニ類の発生が多くなっています。発生に気づきにくく増殖が早いので、卵・幼虫・成虫の各ステージが混在している状態です。すべてのステージに効果のある薬剤（下記）を選択し、（ ）内の作用機構分類コードが違う薬剤でローテーション散布してください。

- ↓
- コロマイト乳剤 (6) 2回以内
 - カネマイトフロアブル (20B) 1回
 - マイトコーネフロアブル (20D) 1回 *完全に死亡するまで3~4日

4 抑制きゅうりの管理

定植時期により生育に差がでています。枝が細く、軟弱徒長で尻細果や流れ果が発生している株は根張りが悪いことが推察されます。草勢維持のためにも、発根促進剤を施用するなど根量増加を図りましょう。

(1) 整枝・摘葉・摘果をして草勢を維持しましょう！

- 整枝：第2次側枝（孫枝）以降は、気温の低下とともに発生しにくくなるので、芯を2~3本以上確保しておく。節間15cmより短い枝は放任する。
- 摘葉：収穫終了した主枝の葉は摘葉する。病葉は優先して摘葉する。上部と低段が混みやすいので、光が入るように積極的に摘葉する。
- 摘果：不良果は、小さいうちに摘果する。

(2) 果やけが発生しやすい時期です。朝の換気に注意しましょう！

夜温が低く経過し、翌朝晴天が見込まれる日は注意が必要です。

夜間の気温が低下したとき、日の出とともにハウス内の温度が急激に上昇すると果実に結露します。この時、一気に換気を行うと湿度が急激に低下し、果実の表皮がひび割れたようになるのが果やけです。

- 早朝晴天が見込まれる場合は、気温上昇前に換気を始めて結露させないようにする。
- 果実表面が結露している場合は、徐々に換気幅を広げてゆっくりと湿度を抜くことで発生を防ぐ。

今年発生が多かった病害虫について

今年は、春先の高温で害虫の発生が多かったものの、夏期は高温・干ばつで病害の発生は少ない状態でした。4月からアザミウマ類の発生が継続し、5月にはホモブシス根腐病やネコブセンチュウ類による萎れ株が発生、6月にはべと病の発生やウイルス症による萎れ・枯死株が見られました。7月からは炭疽病・つる枯病の発生が見られましたが、9月の降雨までは抑えられていました。次年度に向けて、発生要因の確認と対策をしっかりと行いましょう！

1 ベと病

- 発生傾向：生育が前倒し傾向で追肥遅れによる草勢低下、収穫ピーク後の草勢低下により発生が見られました。
- 対策：適期追肥とこまめなかん水で草勢低下を防ぐ。
 - ①定植後から株元かん水の徹底による根張り確保！
 - ②収穫量に応じた追肥（800kg/10a収穫で窒素2.5～3kg/10a）。
 - ③少量多回数（1日2～3回以上）のかん水。

2 モザイク病

- 発生傾向：6月上旬からウイルス発生株の報告が多くありました。8月末には果実でもモザイク病の発生がありました。
- 対策：キュウリモザイクウイルス（CMV）、カボチャモザイクウイルス（WMV）、ズッキーニ黄斑モザイクウイルス（ZYMV）など多くの種類があります。ウイルスに重複感染すると急性萎ちょう症の原因になります。
 - ①定植時に粒剤を施用していても、定植後本葉12枚頃までは寄生していないか確認し、アザミウマ類、アブラムシ類の防除を徹底する。
 - ②粘着トラップ板等による発生予察を行い、発生初期に防除する。
 - ③アブラムシ類の飛び込みを防虫ネット等で防止する。

3 つる枯病

- 発生傾向：排水の悪いほ場を中心に、7月からハウス、露地ともに発生が確認されましたが、乾燥傾向だったため萎れ等激しい症状の発生は見られませんでした。
- 対策：仮支柱と茎葉を誘引したテープがきつすぎたり、テープを残しておいて湿度が保たれてしまったことも要因です。伝染は病斑上に形成される柄子殻や子のう殻が被害茎葉とともに土壤中に残る、あるいは支柱などに付着して越年し発生します。
 - ①排水対策の徹底。
 - ②地際部の誘引テープは主枝がネットで安定したら外す。
 - ③茎部の病斑を発見したら、早期に登録農薬を塗布する。
 - ④梅雨時期等は、雨天日前に予防散布を徹底する。

4 ホモブシス根腐病

- 発生傾向：通常、6～7月に発生が見られますが、今年は、5月から発生が確認されました。
- 対策：転炉スラグによる土壌改良を行う場合は、普及所に連絡してください。
 - ①燐酸過剰土壌や酸性土壌で発生しやすくなるので、土壌分析を実施し、燐酸削減、pH調整を行う。
 - ②化学農薬による土壌消毒は毎年行う必要がある。

③作業者の靴やロータリー等に付着した土壌で伝染するので持ち込みに注意する。

5 アザミウマ類

- 発生傾向：春先の温度が高く経過したことから、早い時期から発生が見られ、発生量も多い状況でした。
- 対策：定植時に薬剤処理を行い、さらに、発生初期の防除を徹底しましょう。定植時に処理を行ったと安心せず、粘着板（黄色・青色）を活用し、発生予察に基づく防除を徹底しましょう。
 - ①赤色防虫ネットをハウス入り口やサイドに設置する。
 - ②粘着板等を設置した発生予察と早期防除。

6 アブラムシ類

- 発生傾向：定植時の薬剤処理によりほ場ではほとんど見かけない状況でしたが、6～7月にかけて親虫の飛来がありました。気づかないままウイルスに感染したきゅうりが多発しました。
- 対策：モザイク病に準じます。定植時の薬剤処理で定植後1ヶ月は虫が見当たらないため『発生がない』と勘違いしてしまいます。粘着板等で発生を確認し、定植後からの防除を徹底しましょう。

7 ハダニ類

- 発生傾向：梅雨明け後は高温・干ばつ傾向だったことから7月から発生が見られ、草勢が低下したほ場では8月下旬頃から一斉に寄生被害が拡大しました。
- 対策：早期発見・早期防除を徹底しましょう。ハダニ類対策の農薬は、生育ステージによる効果や効きの速さが異なるので、状況に応じて適切な農薬を選定します。
 - ①高温乾燥時は定期的に虫眼鏡等で葉裏を確認する。
 - ②少量多回数のかん水でほ場内を乾燥させないようにする。

8 ウリノメイガ・ウリキンウワバ・ヨトウムシ類

- 発生傾向：7月頃から葉の食害、きゅうり果実の肩部の食害が発生しました。9月に入っても気温が高く経過したため、発生が継続しています。
- 対策：①ハウスでは入り口及び開口部にネットを張り、成虫（ガ類）の侵入防止。
②発生が見られたときは、幼虫に確実に農薬がかかるよう散布する。

9 ネコブセンチュウ類

- 対策：①栽培終了時に古株枯死処理や、次年度作付前の土壌消毒、定植前に粒剤等による防除を行う。
②捕食菌や土壌微生物入りの資材による土壌改良を行う。
③機械の共同利用やほ場間の往来の際は、土壌の持ち込みに注意する。
④拮抗植物を植える。



- 9～10月は農作業安全運動推進期間です。
- 適宜、休憩と水分補給をして、熱中症対策をしましょう。
- 農薬は、最新の農薬登録情報を確認して使用しましょう。
- 農地中間管理事業を活用し、地域農業を守りましょう。